

DANIEL DERONDA の 世界

— George Eliotの展開 —

和 知 誠 之 助

(1)

男性も女性も人間という観点からすれば本質的には同じであっても、現実の場に於ては異った生き方をする。現実の場の人間のあり方を追求する小説に於て、作者が女性である場合、女性のあり方が最も関心をひくのは当然である。男にまさるとも劣らない知性を具えた **George Eliot** の場合、特に後期の作には冷たい観念のみが溢れていると思われ勝ちだけれども女としての苦悩が作品の至るところににじみ出ている。¹⁾

George Eliot が生きたヴィクトリア朝の後半は、旧来の伝統・信仰の根底が揺らぎ始めたが、まだ新しい方向が見出されない過渡期であった。女としてのあり方も、男との対等の立場が許されず、男に従属した存在としてしか認められなかった。“**I have as much soul as you,—and full as much heart!**” と **Jane Eyre** が **Rochester** に向って女性軽視の不当を訴える声をあげるようなことが時としてあっても、大抵は軽蔑か無視を受けるだけで、大多数の女性は結局諦めか忍従に屈して、ひそかに自らの胸のうちで不当への叫びを消していた。

「あなたは女ではありません。男の素質をもちながら女であることの屈従に堪えることがどんなことかは、あなたにはどんなに努めても決して想像で

1) 小説を書き始める前 (October, 1854) *Westminster Review* によせた論文に **George Eliot** は文学に性別がないと思うのは大きな誤りだとして次のように述べている。‘In art and literature, which imply the action of the entire being, in which every fibre of the nature is engaged, in which every peculiar modification of the individual makes itself felt, woman has something specific to contribute. (‘Woman in France: Madame de Sablé,’ in *Essays of George Eliot*, ed. by T. Pinney, London, 1963, p.53)

きません。¹⁾」これは *Deronda* の母——こうならねばならぬ、あゝしてはならぬと、事毎に命令する父から去った *Leonora*——が死を前にして、数十年振りの *Deronda* との再会に語った言葉である。そのあり方は極端であって、作者も全面的には容認していないことは、その際彼女に深い苦悩を語らせていることから推察できる。然し男性中心の社会環境・慣習の中で、自己の存在の自由を仰えられ屈従に追いやられる女性の苦悩への作者の共感は、その言葉の中に雄弁に吹き出ている。

The Mill on the Floss における *Maggie*, *Felix Holt* の *Mrs Transome* などの苦悩に連なるものが *Leonora* であり、*Daniel Deronda* の女主人公 *Gwendolen Harleth* である。一方で *Dinah*(*Adam Bede*), *Romola* (*Romola*) *Dorothea* 或いは *Mary* (*Middlemarch*) など、従順な穏かさを具えた女性像を描き、他方 *Hetty* (*Adam Bede*), *Esther* (*Felix Holt*), *Rosamond* (*Middlemarch*) など、自我・虚栄心の強い女性との対決を続けた *George Eliot* の女性像の究極は *Gwendolen* であった。そこには上に挙げたもろもろの女性像がすべて融合され、しかもその何れでもない独自の像が生み出され、伝統と新時代の接点に立つ女性の苦悩が描き尽されている。

(2)

物語は、ドイツのある保養地で *Deronda* が賭博に熱中する若く美しい女性を見るところから始まる。‘a princess in exile’²⁾ であるかのように、母と四人の妹達とから大事にされ気儘に暮していた *Gwendolen* は、結婚して思うことがやれない平凡な状態に陥るよりは、人々にもてはやされる楽しみを味わいたいと、華美・贅沢を楽しんでいる。その時やがて貴族になることを約束されている *Grandcourt* が現われる。彼に豪華・気儘な生活の夢を托して、結婚申込みに承諾を与えようとしたその日に、四人の子さえある内縁

1) *Daniel Deronda*, Ch. LI; Cabinet Edition, Vol. III, p.131.

2) *Ibid.*, Vol. I, pp. 30, 55, 57.

の妻の存在を知って、突然欧州に旅立って来ていたわけである。

彼女は賭博で一度は大金を手にするが、すぐ無一文になった後、一家の破産の報を受けて英国に帰る。万策つきて結局家庭教師になることによって生活を保たねばならぬ屈辱に堪えようとしている時、再び **Grandcourt** から正式に結婚を申込まれる。彼女の誇りと屈辱への反抗心は良心の苛責を投げ捨てさせ、母のために、という苦しい自己弁護の下に申込みを受け入れる。しかし自由で気楽な筈の結婚生活の夢は、夫の冷酷さによって無残に破られ、また夫の子をもつ女性への約束を破った悔恨に責められ、日毎に夫への嫌悪と反抗を高めて行く。

この作では *Silas Marner* 以後の全作品と同じく *plot* が複数になっている。以上の *Gwendolen plot* に *Deronda plot* が並置されている。*Deronda* は父母を知らず、*Grandcourt* の叔父 *Sir Hugo Malinger* の甥として育てられているが、幼時にふと *Sir Hugo* が実の父ではないかとの疑惑に捕われた。ある時水に身を投げようとするユダヤ娘 *Mirah* を助け、知人の暖い家庭に預けて、その母と兄を探し、ユダヤ主義の熱心な信奉者 *Mordecai* が *Mirah* の兄であることを発見する。その間不幸な結婚に悩む *Gwendolen* からその良心の一部の如く頼られるが、やがて自らがユダヤ人であることを知り、ユダヤ民族のために一生を捧げようとする。丁度その頃、夫につれられて地中海をヨットで旅行していた *Gwendolen* は寄港した *Genoa* での舟遊び中、夫の溺死に遭う。*Deronda* は *Gwendolen* を慰め力づけるが、やがて *Mirah* と結婚して、ユダヤ民族のため東方に旅立つ。*Gwendolen* は更生への新しい決意の中に残される。

以上が三巻1233頁に及ぶ長篇の概略である。この作は *George Eliot* の最高傑作である前作の *Middlemarch* をしのぐ売行を示し、一部には彼女の最高の作とする者もあった¹⁾が、殆んどは *Gwendolen plot* にのみ賞讃を送った。作者はそれに不満で、ユダヤ人への同情と適確な描写を讃える一部の声

1) Cf. Oscar Browning: *Life of George Eliot* (London, 1890), pp. 140—4.

2) Cf. Letter to Mme. Bodichon, 2 October 1876: *George Eliot Letters*, ed. by Gordon S. Haight (以後GEL), Vol. VI, p. 290; p. 314.

に心を慰めた。²⁾ 然しその後は F. R. Leavis の批評に代表されるように、この作には George Eliot の最良と最悪が同居するとの見方が一般的である。¹⁾ Gwendolen plot への讃辞は今も絶えないが、Deronda plot では作者の観念的理想が芸術としての昇華をせず、生な素材に止まっているのみならず、作の統一を乱している、と評されることが多い。ある意味ではその批判の正当性を私も認めるに躊躇しない。然し“I meant everything in the book to be related to everything else there.”²⁾ という作者の言葉が思い出される何かこの作にはないだろうか、という疑いをも禁じ得ない。

(3)

Gwendolen の性格の特異性に先づ注目したい。その第一は pride であり、関連するものとして次のものが挙げられる。——気儘（結婚の第一条件として思うまゝにさせてくれる夫を望む）、自己満足（Hetty のように再三自らの美しい姿体を鏡に映して自己陶醉に耽る）、服従・屈服を嫌う火のような反抗性（首の骨を折っても世話されるより勝手にさせて欲しいと願ったり、破産の不幸にも何とかしようと屈せず、結婚後の不幸も他に知られるよりひとり堪えようとする。）、暗いもの醜いものへの嫌悪、明るい陽気・外形美・快楽への偏好（「好きなものを好む以上に好きでないものを嫌う³⁾」）、自己中心的で他へ無顧慮（妹の世話をうさがったり、恩顧を受ける叔父がろばで我慢しているのに立派な馬を望んだりする。）

然し未熟な若さの絵とも云える Gwendolen には同時に孤独への恐怖心が

1) Cf. F. R. Leavis: *The Great Tradition* (London. 1948), p. 79; ‘In no other of her works is the association of the strength with the weakness so remarkable or so unfortunate as in *Daniel Deronda*.’

Gerald Bullett: *George Eliot, Her Life and Books* (London, 1947), pp. 204—5; ‘The truth about *Deronda* is that it gives us, between one pair of covers, the best and the worst that George Eliot can do.’

2) GEL, VI, p. 290.

3) *Daniel Deronda*, II, 42.

強い面もある。母や他の人々には彼女の臆病・恐怖の発作は敏感さ、興奮し易さとみなされる¹⁾けれど、それは烈しい自我に免れ得ない性格である。男性からの賛美は大好き²⁾でも、母以外の人との身体の一部の接触をも極度に嫌ったり、直接愛を云い寄られるのに反対する、いわば潔癖な ‘a certain fierceness of maidenhood’³⁾をもつ——これは彼女自身説明のしようのない一種の自己への怖れであろう。

それは換言すれば悪への怖れである。彼女の恐怖感はその **pride** に由来する。悪をすることはその誇りが許さないのである。腹立ちまぎれに妹のカナリヤを殺すが、後になってそれを思うといつも心の痛みを感じるのは、心の中に ‘a root of conscience’⁴⁾をもっているからである。Mrs Glasher との約束を破って **Grandcourt** と結婚しようとする時、その子供達に対して気前よくするよう夫にすゝめようと思うのも、又後になって **Deronda** に自ら告白するように、結婚に当って母の貧困に気を用いたのもその表われである。

然し彼女は順調な時には、制し難い動きをする自分の心の複雑さに気付いていない。その恐怖心は **Klesmer** のような偉大な音楽家の前では云い知れぬ恐れを感じたり、ジャレードの最中に突発的に現われた死人の顔の絵に驚愕することなどに時折現われるだけである。

Gwendolen に自らの欠陥を自覚させ、悔恨を起させるのは、皮肉にも彼女と同じく、然しより冷酷に利己的な **Grandcourt** である。いつも抑揚のない低い声でのろのろと話す彼は物事をはっきりさせることを避け、明敏に相手の動向を察知して、それに応じて衝突を避け、結局自分の意を通す陰險な男である。

1) Cf. *ibid.*, I, 91.

2) 男性にもてはやされる彼女は、女性には概して不評で、他の女性からは、彼女が男性を好きなのだと思われるが、作者はそれについて、彼女は少しも男性を好まない、女性は彼女に敬意を示さないが、男性は大事にしてくれるからだ、と説明を加えている。Cf. *ibid.*, I, p. 169.

3) *Ibid.*, I, p. 100.

4) *Ibid.*, III, p. 189.

彼が結婚の相手として **Gwendolen** を狙ったのも、彼女の容姿が人並すぐれているのみでなく、猛然と食ってかゝる気魄をもつ女だと知ったからである。窮乏のおそれのある彼女が彼の申し出に逡巡していることを知ると、その為には却って征服欲にかられる。それは愛のためでも利益のためでもない。自分の望んだことが拒絶されることに我慢ならず、彼に愛情を感じずる女性を得るよりも、調教師が馬を調教するように、絶えず反抗するものを膝まづかせることの方により大きな喜びを感じずるからである。

然し高慢な反抗的女性をも沈黙させ無力にさせるものは何かを見抜く鋭い勘をもつ彼だが、**Gwendolen** の心に目覚めた悔恨・自己非難には思いおよばない。彼には倫理感は少しもないからである。彼にとっては自身が宇宙の中心で、渴望するものは権力のみである。他を愛することのできないこの非人間性は、結婚後も彼女に反抗性を認めれば認める程強引にそれを抑圧することに満足を覚えさせる。またその徹底した利己性は、例えば結婚を約し子供までなした **Mrs Glasher** に前に渡したダイヤを新たに結婚する他の女性に譲るよう話しに行った時、彼女が不愉快な思いをさせたと不満に思う点などに顕著に描かれている。夫を捨ててまで彼に走った女性が、他の女と結婚すると聞かされる気持など少しも思いやることなく、たゞ自分の都合のみから他に処する彼の暴虐とも云える利己性は、接触する人すべてを破滅に追いやる **Tito (Romola)** を思い起させる。¹⁾

(4)

George Eliot のよき理解者であった Henry James がこの作の ‘deep, rich English tone’²⁾ を讃えたように、人間存在における環境の大きな影響力を

1) Tito の如く、又 Cass の如く、Grandcourt は溺死する。Romola は海上に漂っても浜に打上げられて新生の道を進むように、Gwendolen も夫の溺死を見て海に飛び込むが救い上げられて、より高い人生の道へ入る。Maggie が Tom と共に洪水に身を没することによって作者は何を意味しようとしたのであろうか。

2) Henry James: *Daniel Deronda: A Conversation in Partial Portraits* (London, 1888), p. 73.

重視した George Eliot はこの作に於ても、Gwendolen の生活感情を左右する大きな要因として彼女の周囲を丹念に描き重ねた。その第一は、彼女が放浪の中に幼時を送り、生活の支えとなる思い出すべき故郷をもたなかった不幸である。*The Mill on the Floss* に於て、幼時のさゝやかな愛情の情景がいかに心の強い支えになるかを作者は強く訴えたが、愛情が根をおろす故郷を欠いたことに Gwendolen の第一の不幸があった。彼女が破産の報を受けて母の住む村に帰り着いた時、作者は陰うつな風景の中に出迎えもなく降り立った彼女を描いて、*'Contemptible details these, to make part of a history ; yet the turn of most lives is hardly to be accounted for without them.'*¹⁾ と記して、そうした微細なものが彼女の心に重く響き、その後の行動を方向づけたことに注意を促しているのもその為である。

George Eliot のすべての作に見られるようにこの作にも、Klesmer, Lush, Hans, Mrs Glasher, Mr Davilow, Gascoign 夫妻など多くの素晴らしい副次的人物が登場するが、すべて Gwendolen の生活を夫々異った意味に於て規定する。例えば彼女の母 Mrs Davilow の娘への溺愛、それに応ずる Gwendolen の愛情が母の貧困への心配となって Grandcourt との結婚に大きな動機づけをしたことは既に触れたが、同様に Gascoign 叔父の親切が彼女の虚栄心を増長させたり、又経済的不幸に際して家庭教師の職を見つけてやろうとする配慮が却って彼女に屈辱的境遇への反抗をかり立て、結婚に急がせたことも否定できない。彼女に Mrs Glasher の存在を報せた Lush の敵意は、結婚後も直接に、或いは Grandcourt や Mrs Glasher を通して間接にも、彼女の生活感情を大きく左右する。

副次的人物によるのみでなく、賭博場での出来事や経済的不幸などの外的条件も加わって、Gwendolen が Grandcourt を受け入れ、悲痛な結婚生活に導かれたのは、自らの意志のみからではなく、種々の外的圧力によることが明らかにされて行く。

Gwendolen の対人関係で中心をなすものは勿論 Grandcourt であるが、

1) Op. cit., I, p.341.

その反対的作用をなすものとして Daniel に作者がかけた意義を見落してはならない。前者によって女性の破壊者、その向上への意欲の障害としての男性の存在が象徴されているが、後者によって女性の協力者或いは救済者としての男性が象徴されている。二人の対照的な男との関係のどちらを切離しても Gwendolen の展開を考えることはできない。

この大きな contrast だけでなく、George Eliot のすべての作におけると同じく、幾つもの対比が深く複雑な意味を伝える。歌手として舞台に立つという問題に於て、Gwendolen と Mirah、更に Deronda との対照がある。前者は華やかな舞台生活に窮境を脱する夢を托そうとするが、Klesmer の断定でその夢を諦める。これに反して Mirah は舞台で成功させようとする父の願望を嫌がり、更にある貴族に売られようすると逃走する。が Gwendolen は Grandcourt に自らを「売る」。Deronda も Sir Hugo からの歌手生活への示唆をしりぞける。この点で Deronda と Mirah との究極の結合及び Gwendolen からの訣別が暗示される。更に Deronda を捨て舞台に帰った彼の母と Gwendolen との類似性、従って彼とその母との別離も暗示される。Deronda と Mirah とは更に両者共親探しの課題を与えられている点にも類似性がある。

Deronda は更に他の点でも Gwendolen 及び Grandcourt と対照をなす。前者が常に他への共感に基いて言動するのに反し、Gwendolen も Grandcourt も他をかえりみず全く利己的である。この二人の愛情を無視した結婚は Klesmer と Miss Arrowpoint との愛情と理解による結婚、更に Deronda と Mirah との結婚とも対照される。然し最も根本的なのは、民族のために生涯を捧げようとする Deronda と自らの幸不幸の中に呻吟する Gwendolen との対照であろう。これは後に述べるように男性対女性の対照 といつてよい。

物語は Gwendolen と Deronda との遭遇から始められ、二人の別離によって閉じられるが、二人の運命の交錯は時間的対比によっても示される。例えば Gwendolen と Grandcourt とが始めて会うのは、Deronda が Mirah

の投身を救うのと同じ七月末であり、¹⁾ **Deronda** と異り、**Gwendolen** が水に落ちた夫に助けの手を差し出さず **Grandcourt** が溺死するのは、**Deronda** が母からユダヤ人だと聞かされた直後で、**Gwendolen** と **Deronda** の夫々の危機が同じ場所 (**Genoa**)、同じ頃 (七月)²⁾ に起る。

かように種々の面で **Gwendolen plot** は **Daniel plot** との対照に於て関係づけられ、夫々の中心人物は、実際に会い話し手紙を交換するなどの具体的な交渉をもつ以上に著しい対照をなすという点で二つの **plot** を結合している。対照は単に相異を示すのみでなく、相互の関連性を示すものである。

Henry James は、**Deronda** が東方へ行くと **Gwendolen** が知るという状況は彼女にとって皮肉なものであって、この物語におけるユダヤ人問題の重々しい構造はすべて、この特定の打撃を強めようというはっきりした目的のために作者によって作られたのではないかと思われる、³⁾ という意味のことを述べている。これは正しい指摘であって、二つの **plot** の関連性に関して、今まで挙げた作品の構造や表現方法に見られるものと共に、作者の意図を簡潔に説明している。然し **Daniel** のみならずその他のユダヤ人問題に関する部分の人物像が、ほとんど生きた人物としての具象性をもたず、理想化された観念に終わっていることなどに原因して、却って作者の意図と創り上げられた作品との間の不幸な隔絶を証明することにもなる。

なる程思想家としての **George Eliot** と芸術家としての **George Eliot** との間に見られる不幸な隔絶がこの作にも顕著なことは誰も否定できないであろう。然し単にそれを指摘して終ることは、人間の創ったものである文学を考える場合に許されることであろうか。作中人物を考える時、一点非の打ちどころのない人物は生きていないと評されるように、作品の場合にも、欠点のあるものに人間の創造物としての意味を認めようとするのは、芸術の何たるかをわきまえぬ論理の飛躍であろうか。こゝで更に別の角度からこの作の

1) Cf. *ibid.* chs. 10 & 17.

2) Cf. *ibid.*, chs. 51 & 54.

3) Cf. *op. cit.*, p. 90.

世界への新たな解釈を試みてみよう。

(5)

この作の表現上特に注目に価するのは心理分析の深化である。蝶よ花よともてはやされ、自らの美貌・才芸に陶醉し、賭博やダイヤの象徴するものに揺り動かされる **Gwendolen** の辿らざるを得ない必然的な過程におけるその複雑・微妙な心理の分析は感嘆に価する。特に彼女と **Grandcourt** との最初の会合の時、殆んど二人の対話毎に括弧を用いて彼女の心中での反応を記した方法¹⁾は、「意識の流れ」を刻明に追う **Henry James, V. Woolf, James Joyce** などの心理分析重視の方向の先鞭として早くから注目されている。²⁾ また賛美になれた **Gwendolen** が **Klesmer** から一流の芸術家にはなれないと断定された時のみじめな思い、万策つきて屈辱的境遇の諦めに入ろうとした時 **Grandcourt** から会いたいと報せを受けた時の彼女の心の動揺、更に **Grandcourt** からいよいよ結婚を申込まれ、拒絶の気持から、法廷で名を呼ばれて答えるような重苦しい“**Yes**”の声を発するに至るまでの彼女の心の奥底での動きの提示などは精緻を極めている。

然しこうした表現の方法の考察は、単に技巧の新しさ、卓越性を讃えるのみで終わってはならない。それだけの複雑・微細な取扱い、内的実在とも云える心理との徹底的な対決を必要とした根本的原因は作者の人間観にあるからである。芸術作品の表現の考察は、作者の人間観との関連性に注意を払い、そうした表現をせざるを得なかった根本的原因を明らかにすることによって意味を生ずる。

1) Cf. *op. cit.*, I, pp. 163—6.

2) Cf. John Blackwood's letter to George Eliot, 10 November 1875 (GEL, VI, p. 182); 'Her running mental reflections after each few words she has said to Grandcourt are like what passes through the mind after each move at a game, and as far as I know a new device in reporting a conversation.' See also F. R. Leavis, *op. cit.*, pp.102—3.

George Eliot は、既に触れたように、一方では哀れな利己的自負に踊らされる一群の女性像を描いたし、他方では生来の高い精神が歪められた環境、教育などの現実禍に禍されて価値あるものを知らず、高慢・虚栄・或いは迷妄の道を辿って無価値なものを求めて高い精神を徒らに浪費するが、やがて大きな不幸を通じて始めて、愛の価値に気付き、彼女の所謂 ‘larger life’ を生きようと渴望するようになる精神を繰返し描いた。(Janet Dempster, Adam Bede, Silas Marner, Romola, Esther, Dorothea など。) Gwendolen はこの両者に連なる。

George Eliot に前者の人間像を再三描かせたのは、自画像に近いと思われる Maggie からも推測されるように、彼女自身にも女性一般の陥り易いこうした一面が強くあったことを自ら意識し、それと対決しようとしたからであろう。然し彼女には更に Gwendolen のもつ今一つの要素があり、それが特に Deronda に抽象した形で示される。Deronda のもつ他への深い共感と ‘larger life’ への志向と、Gwendolen の強烈な自我とは共に作者自身の内部で葛藤を続けた相反する要素である。Hetty は自らの犯した罪のため獄に投ぜられ、僅かに死刑を免れて遠島に流される。Rosamond は高い志に燃える夫を破滅に追いやる。然し Esther は Felix の感化を受けて新生に目覚める。かように虚栄心強く自己中心的な女性に対する作者の姿勢は一様ではないが、それは作者のそのような女性像との対決の動揺、換言すれば作者の対決の真剣さを物語るものである。又ユダヤ人問題を取扱うことに対する世人の抵抗を予期しながら敢て Deronda plot を描いた George Eliot の意図は、¹⁾

1) Cf. GEL, VI, p. 201 (To Mrs. Harriet Beecher Stowe, 29 October 1876); ‘As to the Jewish element in “Deronda,” I expected from first to last in writing it, that it would create much stronger resistance and even repulsion than it has actually met with. But precisely because I felt that the usual attitude of Christians towards Jews is—I hardly know whether to say more impious or more stupid when viewed in the light of their professed principles, I therefore felt urged to treat Jews with such sympathy and understanding as my nature and knowledge could attain to.’

前者の人間像を描くのみでは満足し得ない彼女の人間観に根本的原因があることを証明する。

Daniel Deronda 以前の作がすべて過ぎ去った時代に題材を求めているのに対し、この作に於てのみ作者の現在に近い時点に物語が展開する。また場所の面から見れば、前期では主として田園を舞台にし、古き伝統のもつ美と英知を主調にして、移りつゝある人間生活の哀楽を描いた。*Romola* 以後はより広い社会の中に新しい人間像を探ったが、その頃から次第に作者の関心は田園より文明社会に、すべての人間に共通なよろこび悲しみのみでなく複雑化した人間社会のより深い問題に向け始められたと云ってよい。*Daniel Deronda* の世界は高度に文明の発達した社会である。Grandcourt のように利己的で他に子までなした女をもつ男でも、富と地位がありさえすれば愛情を問題外にして社交界の淑女に結婚を望まれる時代、偉大な音楽家に教えを受けるのも単に装飾としか考えられず、また賭博に若い生命が費消される時代、精神の真実の希求が狂人視される時代——これは現代の「文明」社会の現実である。時代の変動と田園から都市への移行に伴う多くの病毒の中で、愛を唯一の支えとする女性是如何に生くべきか、この困難な問題の探究に向った George Eliot はより複雑さを増す人間存在の不可思議さ、殊に女性の生き方に一層昏迷させられたに相違ない。‘double plot’ が後期の作に常に用いられるのもその為である。*Daniel Deronda* に於て、最も高い領域の人間性と最も低い人間性という両極端——自らのみでなく時代のすべての人々のもつ矛盾——を交錯させたのも、人間存在の複雑さとこの作者の対決の真剣さを物語っている。

(6)

1872年秋ドイツを旅行中の George Eliot は Homburg で賭博に熱中する人々を見て憐れみより 嫌悪をかき立てられ、盗みも賭博に比べると heroic だと思う。そしてこの浅ましい、金をあさる悪魔にとりつかれた若い女性を

見てひどく悲しみ次のように記している。

'It made me cry to see her young fresh face among the hags and brutally stupid men around her.'¹⁾

この時の情景が三年程後に発表された *Daniel Deronda* の第一章に描かれ、この若い女性が女主人公のモデルになった、と云われたりしている。が注意しなければならないのは、Gwendolen に対する作者の姿勢である。最初の方では彼女の愚かな利己性の強調が目立つが次第に彼女の苦悩への共感が増して行く。

Ch. XI の終りに作者は次のように述べる。

Could there be a slenderer, more insignificant thread in human history than this consciousness of a girl, busy with her small inferences of the way in which she could make her life pleasant . . . What in the midst of that mighty drama are girls and their blind visions? They are the Yea or Nay of that good for which men are enduring and fighting. In these delicate vessels is borne onward through the ages the treasure of human affections.²⁾

こゝで作者は男性のと異なる女性の生き方への共感を訴えている。主として前期の諸作で王侯貴族よりもむしろ名もなき人々の日常の喜怒哀楽に人間存在の深い意味のあることへ読者の注意を向けさせようとした作者は、こゝでは小さな愛憎の世界に一喜一憂するかよわき女性のあり方にこそ「人間の愛情の宝」が運びつがれて行くことを理解して貰おうとした。変動・動揺の時期にも、いやむしろそのような時代にこそ、愛情の世界に迷い悩む魂が、たとえそれが無価値なものに見えても、人間という複雑・微妙なあわれな存在の動かし難い真実であることを訴えようとしたのである。

この作以前のすべてに於て、物語の最後に作中人物のその後の動静が要約されているが、この作は Grandcourt の溺死後ひとりになった Gwendolen を後にして Deronda が東方に旅立つことを述べただけで終わっている。これ

1) GEL, V, p.314 (To John Blackwood, Homburg, 4 October 1872.)

2) Op. cit., I, pp. 181—2.

は一時的現象で人間を評価することに誤り多いことを恐れて、人物の一生全体を見ることを重視した **George Eliot** の従来的人物描写からすれば大きな変化であって、一見 **Gwendolen** に対する冷たい姿勢と見られないこともない。然しそれは決して作者の人間観の変化によるものではなく、むしろ作者の現実への洞察が更に鋭さを増したことに原因を求めねばならない。換言すれば、作者の現実認識の深化である。**Gwendolen** の **Grandcourt** からの分離は男の「悪」からの分離であるが、男のよき部分の象徴である **Deronda** からも突き離される彼女に、作者は女性の生き方の一つの真実を見たのである。**Henry James** の **Gwendolen** についての言葉をかりれば、「人生を構成しているものは、自分が馭者だと思って鞭を鳴らしていた後に、自分はせいぜい馬車の滑稽な第五番目の車輪にすぎないと、各人が発見することにすぎないではないか。」¹⁾ という人間への深い理解が **Gwendolen** を一見冷たく投げ出させたのである。男性対女性という対立を作者は自らの内部にも見出すと同時に時代の苦悩として一般の男性対女性の対立の中にも見出して、二つの相矛盾するような **plot** を並行させざるを得なかったのだと思われる。²⁾

Gwendolen は **Deronda** の後に残されたといっても、二人は全く分離した訳ではない。肉体上は離れても精神的にはより緊密さを増した、と作者は付け加えることを忘れなかった。たゞ作者は **Grandcourt** によって男性の悪を **Deronda** によって男性の善を象徴させる意図をもっていたとしても、ある面からすれば、前者は高慢で利己的な女性のようなどうか、³⁾ 後者は女学生の

1) *Op. cit.*, p. 89.

2) **Robert Speaight** は作者がこの作に寄せた目的を解く鍵は **Ch. XI** の終りに見出されるとして、上に挙げた部分を引用して次のように論じている。「**George Eliot** は **Gwendolen** の小さい個人的世界と **Deronda** の従事する大きな目的の世界との間の対照を描こうとした。彼の彼女への憐れみと彼女の彼への愛だけが二つの半分を結びつけるものである。」(*George Eliot*, London, 1954, p. 108.) これは鋭い指摘であるが、既に述べて来たところから、この作の根本的特質を説明するには不十分なことが明らかであろう。

3) Cf. *Spectator*, 8 April 1876, p. 464: 'Mr. Grandcourt shows to Lush rather the kind and degree of insolence which a proud and selfish woman would show to a dependent, than what a man who has at least passed through the public discipline of school and college, would be likely to show.' (Quoted from *GEL*, VI, p. 240, fn.) See also **B. Hardy**: *The Novels of George Eliot* (London, 1959), p. 226.

hero である、¹⁾ などの批判を免れない。几帳面細心で粗暴に近づかず、常に天使か仏の如く思われ、他につくし高い理想を希求するその人間像は、余りに観念的で生命を欠くと評されても致し方ない。

そうした点が作者に ‘I have thought very poorly of it myself throughout.’²⁾ とか ‘I did what I chose to do—not as well as I should have liked to do it, but as well as I could.’³⁾ などこの作に対する不満を自ら語らせたのであろう。たゞ「精一杯努めた」と併せて記したり、‘the relation between the presentation of the Jewish element and those of English Social life’⁴⁾ を認めた読者を大変喜んだりしたことからも察しられるように、無意識のうちに過ちを犯し、悔恨にふるえる女性像と並べて、そうした理想的人間像を描いて僅かに救いの手を差し出さずにおれなかった点に、再び繰返すならば、作者の人間への深い洞察が見られるのみでなく、複雑な人間性との作者の悲愴な対決・苦悩がにじみ出ている。

「もし George Eliot が古い生活様式への熱狂的同意の時代にあったら、彼女はおそらくもっと完全な、もっと一貫して順調な発展をしただろう。」という Henry James の見解は完全な誤解だと思われる、という F.R. Leavis の所論⁵⁾ に賛成したい。George Eliot は伝統の中にもありながらも変動を余儀なくされる時代の倫理的苦悩を自ら悩み、従ってそれへの深い洞察と共感を表現したところにその偉大性がある。彼女は現実を感じとるに終らず、鋭く洞察した現実の人間の言動の底にある理由を明らかにしようとした。たゞ彼女は抽象的な解釈よりも現象に基いた具体的解明を試みたことは、多くの観念的表現にも拘らず、彼女を小説家として発展させた所以である。動く現実そのものに第一の関心を集中した彼女は動くが故に固定したものより一層複雑な時代にあつたために、「一貫して順調な発展」ではないとしても、より深い、より意義ある発展をなし得たのである。

1) Cf. Leslie Stephen: *George Eliot* (London, 1902), p. 190. & F. R. Leavis, *op. cit.*, p. 82.

2) GEL, VI, p. 200—1.

3) *Ibid.*, p. 304.

4) *Ibid.*, p. 379.

5) Cf. *op. cit.*, pp. 122—3.